

—ポーランドだより—

変わりゆくポーランドの ヨハネ・パウロ2世崇敬

津田晃岐

私はこの2年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。

また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学と外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1. 列福

今年の復活祭はいつもと少し違った。

復活祭は、年によって日付が変わる移動祝日で、「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」に祝われる。今年は、復活祭が4月24日と非常に遅く、翌25日もポーランドでは祝日であることから、一週間後のメーデー(5月1日)と憲法記念日(5月3日)の祝日も合わせて、大型連休の年、祝日ムードの続く年となった。

しかも今年の場合、さらにもう一つ、多くのポーランド人にとって重大なイベントが5月1日に行われた。ポーランド人教皇ヨハネ・パウロ2世の列福である。——この日、ローマ



1日、バチカンのサンピエトロ広場で行われた列福式に集まった群衆

ローマ法王ベネディクト16世は前法王ヨハネ・パウロ2世(在位1978年~2005年)を「福者」とするミサを行った。広場周辺には100万人以上の信者らが集まった。

教皇ベネディクト16世によってヨハネ・パウロ2世の列福式のミサがバチカン市国のサン・ピエトロ広場で執り行われ、前教皇が公けに「福者」として宣言された。

ローマ・カトリック教会では、生前に聖性を示していたと思われる人物の死後、申請によって、故人の列聖を最終目的とした調査が始められることがある。教皇庁の列聖省が列

聖調査の開始を発表すると、その故人は「神のしもべ」と呼ばれ、その後、故人の生き方が英雄的・福音的であったことが認められると、「尊者」として宣言される。そして「尊者」の執り成しによる奇跡が一つ認定されると、「福者」として宣言され、さらに「福者」の執り成しによる奇跡がもう一つ認定されると、「聖人」として宣言される。故人が「福者」の列に加えられることを「列福」と言い、「聖人」の列に加えられることを「列聖」と言う。「福者」になるための手続きと「聖人」になるための手続きは同じようなものである。まず、故人が生活していた地域の司教のもとで様々な資料が集められ、厳密な調査が行われる。その後、司教区的最終的

な調査資料に基づいて、バチカンの列聖省の専門委員会、枢機卿委員会が再度厳密に調査し、最終的にローマ教皇が教令に署名する。そして、列福式あるいは列聖式のミサによって公けに宣言される。通常、列聖調査は死後5年を経ないと始められない。

「福者」と「聖人」の違いは、認定された奇跡の数と、崇敬される地域の差である。「聖人」は、全世界のカトリック教会で崇敬され、その聖人の日が祝われるのに対し、「福者」は、地域的に崇敬され、その福者の日が祝われるだけである。「福者」は「聖人」の位への前提として付けられる敬称であり、「福者」を経ずに「聖人」になることはない。

ヨハネ・パウロ2世(1920-2005、在位1978-2005)の場合は、異例中の異例である。2005年の死後まもなく列聖調査が始められ、2009年に「尊者」として、そして今回「福者」として宣言された。これから毎年10月22日が「ヨハネ・パウロ」の日として祝われることになる。列福の際に審査された奇跡は、パーキンソン病を患っていたフランス人修道女マリー・シモン・ピエール・ノルマンがヨハネ・パウロ2世に執り成しの祈りを捧げたところ、病気が治癒したというものである。専門の医師や学者が詳しく検査した結果、修道女の病気がどうして治癒したのか、医学的にも全く説明できないとして、列聖省はこれをヨハネ・パウロ2世の執り成しによる奇跡として認定した。パーキンソン病は、前教皇自身が患い、苦しんだ病気である。治癒した修道女は、5月1日の列福式に参列し、元気な姿を公衆に見せただけでなく、前教皇の

「列福式」に飾られた
故ヨハネ・パウロ2世の写真



聖遺物(生前に採取された血液)を祭壇まで運ぶという大役を果たした。

列福式のミサが行われた日は、ちょうど復活祭後最初の日曜日だった。復活祭の次の日曜日は、2000年にヨハネ・パウロ2世が「神のいつくしみの主日」として制定した祝日である。この「神のいつくしみの主日」の制定を訴えたポーランド人修道女ファウスティナ・コヴァルスカを列福し(1993年)、後に列聖した(2000年)のも、ヨハネ・パウロ2世である。

報道によれば、5月1日の列福式のミサには、世界中から150万人の人々が集まり、ポーランドを含め87カ国の元首や王族も参列した。式場となったサン・ピエトロ広場の中に入ることでできた30万人のうち、およそ8万人がポーランド人だったと言う。ミサでは、聖書の朗読のうち(日曜日の朗読は、常に「第1朗読」、「第2朗読」、「福音朗読」から成り、「第1朗読」と「第2朗読」の間には「詩編」が歌われる)、「第1朗読」の「使徒言行録」の一節は、ポーランド語で読まれた。



故ヨハネ・パウロ2世の「列福式」が行われたバチカン法王庁

2. 「私達の教皇」

1978年、枢機卿カロール・ヴォイティワは、58歳で第264代教皇に選ばれ、「ヨハネ・パウロ2世」となった。455年ぶりの非イタリア人教皇、もちろん、初めての「ポーランド人教皇」である。こうして、ヨハネ・パウロ2世は「私達の教皇」となった。

世界がまだ冷戦下にあった時代である。共産主義国出身の、この新教皇の方針に世界中が注目した。カトリック教徒だけでなく、文字通り全世界が見守る中、1978年10月22日、ヨハネ・パウロ2世は教皇として、その第一声を発した。バチカンのサン・ピエトロ広場で行われた教皇就任ミサでの、歴史に残る説教である。

怖がらないで！ 開くのです！ キリストに扉を大きく開くのです！ 彼の救いの力に、国家の境界を、経済制度や政治制度の境界を、文化や文明や発展度といった広い様々な分野の境界を開くのです！ 怖がらないで！ 「何が人間の心の中にあるか」、キリストは知っています。彼だけが知っています！

それは、尤もらしい道徳的な教訓でも、小難しい神学的な説明でもなかった。また、安易な闘争心を煽る挑発でもなかった。新教皇のこの言葉は、

世界を驚かせたと同時に、人々の心に直接飛び込み、個々人がそれまで内に眠らせていたものを揺り起こすことになった。

翌1979年、ヨハネ・パウロ2世は祖国ポーランドへ最初の巡礼を行い、そこでさらに明確に自らの考えを表明した。共産主義政府が神経をとがらせる中、大方の予想に反して、制度の対立にもイデオロギーの闘争にも触れなかった。しかし、希望を失わない信仰と、すべてを受け入れる愛と、対話へ踏み出す勇氣とを訴えた「私達の教皇」の言葉は、却って人々を力づけた。当時、共産主義政権のもとで沈黙を強いられていたポーランド人にとって、この言葉がどれほど勇氣を与えたことか、想像に難くない。そして、ヨハネ・パウロ2世の言葉は、ポーランド人のみならず世界中の人々の心を捉え、やがて共産主義国家を倒していく原動力となった。

また晩年、ヨハネ・パウロ2世はパーキンソン病に苦しみながらも、公務を続けた。「格好悪い」、「痛々しい」、「威厳が失われる」、「可哀そう」といった批判や同情の声が上がる中、教皇は病気を少しも隠そうとせず、ありのままの自分を公けに晒し続けた。その姿は、カトリック教徒だけでなく、多くの人々の心を打った。

個人的な話になるが、クラクフ市で留学していた時、私はヨハネ・パウロ2世と摺れ違っていた。教皇は1999年6月5日から17日に掛けて、祖国ポーランドへの7度目の巡礼旅行に来ていた。そして6月15日、司祭としての出身地であるクラクフ市で、教皇はミサを執り行う予定だった。ミサは、クラクフの中心街から少し外れた「ブウォニャ Błonia」と呼ばれる広大な芝生公園で行われることになっていた。私の住んでいた学生寮は、そのブウォニャ公園とは目と鼻の先にあった。当時まだキリスト教徒でなかった私は、学生寮の窓の下をブウォニャ公園に向かって朝から絶え間なく続く人々の列を、好奇と冷淡の入り混じった眼で眺めていた。後で

知ったことだが、結局この時、教皇は風邪を引いたためにブウォニャ公園には現れず、代わりにミサを執り行った枢機卿が教皇の説教を読み上げたようだ。

2005年4月2日午後9時37分(バチ

カン時間)、「私達の教皇」の訃報を知ったポーランド人の悲しみは、非常に大きかった。現に私の友人の一人も、教皇が逝去したことを聞いた瞬間に、思わず自分の車に乗り込み、そのままバチカンま



ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世に謁見するヴァウエンサ「連帯」委員長

で飛ばしたそうだ。ポーランドの国中で追悼のミサが行われ、教皇への感謝を記した横断幕を掲げて若者達が通りを練り歩き、色ガラスの付いた墓前灯(znicz)と花束とが町を埋め尽くした。そして、教皇が実際に訪れたことのある場所では、信者達の持ち寄った蝋燭の火が夜の広場に十字架を描いて浮かび上がった。

バチカンのサン・ピエトロ広場で行われた葬儀ミサには、世界中から 400 万人以上が集まり、うち 100 万人がポーランド人だったと言う。人々は「SANTO SUBITO! (今すぐ聖人に!)」の横断幕を掲げながら、口々に「SANTO, SANTO! (聖人、聖人!)」と叫んだ。ミサの最中、棺の上に置かれていた福音書のページを、折からの強風がめくっていった。そして最後には、福音書を閉じてしまった。

ポーランド人の「ヨハネ・パウロ2世崇敬」は、今でも残っている。ヨハネ・パウロ2世に対する絶対的な信頼と尊敬と愛情とは、今も変わらない。ポーランド人はよく「私達の教皇」という表現を使うが、もちろん、それは現教皇ベネディクト16世ではなく、「ポーランド人教皇」ヨハネ・パウロ2世を指している。

今年1月にヨハネ・パウロ2世の列福がバチカンの教皇庁によって発表される否や、ポーランドでは、教区教会から国立大学まで、大小・聖俗の様々な団体・組織によって5月1日のバチカン行き巡礼ツアーが企画された。チケットは即完売となったり、値段が数倍に跳ね上がったたりしたことがニュースになっていた。

また、5月の列福式が近づくと、主婦向けの女性誌から一般向けのゴシップ雑誌、知識人向けの政治雑誌まで、様々な雑誌でヨハネ・パウロ2世に関する記事が現れ始めた。テーマもそれこそ多岐にわたり、ヨハネ・パウロ2世が実は甘物好きだったとか、新品の靴が嫌いだったといった教皇の日常生活に取材した記事から、教皇の足跡を詳しく紹介した伝記の記事、また教皇の業績を歴史的な文脈の中で評価しようとする記事まであった。中には号外や特集を組んだ雑誌もあった。

3. JP2 世代

ヨハネ・パウロ2世に対する崇敬は、決して年配の世代に限ったことではない。現在45歳前後の比較的若い世代、またそれより若い世代の中にも、意外と強く残っている。彼らは、ヨハネ・パウロ2世の名前から「JP2世代」と呼ばれ、ポーランドだけでなく、世界中にいる。「JP2世代」は、教皇と若者達との特別な結びつきを端的に表す現象であると同時に、ヨハネ・パウロ2世が若者達に対して持っていた特別な姿勢を証しする言葉でもある。

ヨハネ・パウロ2世は、国連が「国際青年年」に

制定した1985年、世界の若者に向けてメッセージを発表し、翌年から毎年「受難の主日(「枝の主日」とも呼ばれ、復活祭の一週間前の日曜日のこと)」を「世界青年の日」として祝うように定めた。メッセージの中で、教皇は若者達をこう呼んでいる。

あなた達は世界の未来です！ あなた達は教会の希望です！ あなた達は私の希望です！

そして、人生を形成する上で若い時期がいかに大切か、何を目指してどのように生きるべきか、若者達にこう語りかけている。

愛する若者の皆さん！ この豊かさを受け取らないようにしなさい！ あなた達の人生の設計図に、歪んだ、貧しい、偽りの内容を書き込まないようにしなさい！ 愛は「真実を喜ぶ」ものです。

この真実を、現にそれがあつ場所を探しなさい！ もし必要なら、決然として、流通している価値観や宣伝されているスローガンに逆らつて行きなさい！ 人間に要求を課す愛を怖がることのないように！

そうした要求こそが——教会の変らぬ教えの中に見出だせるように——あなた達の愛を真実の愛とすることができるのです。

さらに1987年以降、世界の若者と直接出会う機会を持つと、ヨハネ・パウロ2世は「ワールド・ユース・デイ」(「世界青年の日」の世界大会として2~3年に一度開催される)を各地で開催した。教皇の真っ直ぐな心と、深い愛と、時折見せる父親のような厳しさとに触れ、若者達も教皇を信頼し、慕うようになった。そして教皇と会うために、次第に多くの若者が世界中から集まるようになり、「JP2世代」が形成された。「ワールド・ユース・デイ」は、これまでにブエノスアイレス(アルゼンチン、1987年)、サンティアゴ・デ・コンポステーラ(スペイン、1989年)、チェンストホヴァ(ポーランド、1991年)、デンバー(アメリカ、1993年)、マニラ(フィリピン、1995年)、パリ(フランス、1997年)、ローマ(イタリア、2000年)、トロント(カナダ、2002年)、ケルン(ドイツ、2005年。この年から現教皇ベネディクト16世)、シドニー(オーストラリア、2008年)で開催され、ヨハネ・パウロ2世の跡を受けた現教皇ベネディクト16世も、前教皇の路線を引き継ぎ、若者達との出会いを持ち続けている。

2005年4月2日、臨終の床に就いていたヨハネ・パウロ2世は、数千人の若者がバチカンに集まってサン・ピエトロ広場

で彼を見守っていることを聞くと、「あなた達を探していた。今はあなた達が私の



許へ来てくれて、どうもありがとう」と言ったという。

この言葉を題に冠した映画『あなた達を探していた』が今年 3 月に封切られた。ヨハネ・パウロ 2 世について、その在位中の各国訪問や巡礼旅行について描いたドキュメンタリー映画だが、特に教皇と若者達との交流にスポットライトを当てている点が面白かった。

ヨハネ・パウロ 2 世の映画に関しては、もう一つ、私にとって忘れられない経験がある。ヨハネ・パウロ 2 世との不思議な縁を感じる経験である。

2008 年、ポーランド人枢機卿スタニスワフ・ジヴィシュの回想記『証言 Świadectwo』が映画化された。ジヴィシュ枢機卿は、ヨハネ・パウロ 2 世がまだ枢機卿だった時代からその秘書として、共に生きてきた人物である。彼の「証言」を基にしたドキュメンタリー映画の再現シーンに、私がフランシスコ会修道士の役で出演することになった。

ヨハネ・パウロ 2 世は、在位中に 100 カ国以上を訪問したことで知られるが、訪問先でミサを行う際には必ず、説教やスピーチの一部あるいは全部を、現地の国語で行うのが常だった。実際、1981 年に日本を訪問した際も、日本語で説教をしている。そしてその時、教皇に日本語を教えたのが、フランシスコ会の西山達也神父だった。

映画の中で、私は「教皇」に日本語の祈りの一

西山達也神父の著書

「日本語で話しつづけた教皇
ヨハネ・パウロ二世」

日本語習得のご様子、来日時のエピソードとともに、その後のパチカンの毎週水曜日の一般謁見において、特別に日本人巡礼団に向かって”日本語”で話された 13 年間約 250 回分のスピーチを収録



節を教えた。それは、ミサの福音朗読後に司祭が小声で唱える祈り、「神の言葉によって、私達が清められますように」というものだった。現在は洗礼を受けてカトリック教徒になっている私にとって、10 年以上も前に摺れ違ったヨハネ・パウロ 2 世との意外な形の出会いだった。

ヨハネ・パウロ 2 世がその最初の説教で訴えた通り、今や国境は開かれた。イデオロギーの対立は終結し、ポーランドも豊かになった。しかし、今のポーランドがヨハネ・パウロ 2 世の期待した方向へ進んでいるかどうかは、分からない。それこそ、「JP2 世代」、そしてさらに若い世代に掛かっているのだろう。今年 2011 年 8 月には、スペインのマドリードで次の「ワールド・ユース・デイ」が開かれ、ベネディクト 16 世と世界中からの若者達とが出会うことになっている。

つだ・てるみち (ポズナン外国語大学講師)

<新連載> ポーランド歳時記

Nadleciał gołąb

I przysiadł na balkonie

- więc to już wiosna!

Yōseki



ポーランドの冬は寒いだけでなく、長くて暗い。雪もよく降る。今年の冬もそうだった。ある日のこと、鳩が突然ベランダに飛んできた。三年前の春を思い出す。番いの鳩が我が家のベランダに空の植木鉢を見つけると、巣を作り、卵を産み、二羽の雛が孵った。夫と二人で見守るうちに、雛は育ち、やがて巣立っていった。

ベランダに
降り立つ鳩と
春は来ぬ
陽石

<ポズナン在住ポーランド人女性“陽石”さんから届いた俳句>幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。日本文学について教えるかわら、ポーランド語への翻訳にも携わる。自らの詩作を雑誌に発表し、俳句は三年前から詠みはじめる。生花を趣味とし、草月流の雅号も「陽石」を名乗る。

ティシュキエヴィッチ書記官、
朝鮮民主主義人民共和国へ行く
(2011/05)

POLE 印刷日の前日に届いた写真。
ひとまず、写真のみで近況をお知らせ
します。ラデックありがとうございます！

